

# フィンランドの職業学校の 現況と成人教育との関わり

—北部地域での現地調査結果より—

## The Current State of a Vocational School in Finland and the Relationship with Adult Education

-Results taken from a Field Survey in the Northern Region of the Country-

Kyo Otani

大谷 杏

### 要旨

新型コロナウイルスの蔓延により、日本でも仕事のオンライン化が進んだ。従来の勤務形態が見直され、今後はより専門性に特化した雇用にシフトしていくのではないかという見方もある。またそのような期待感からか、就職に繋がる資格の取得にも関心が集まっている。しかし、日本において社会人の学び直しには未だ多くの壁が立ちはだかつており、難しいのが現状である。本稿では、日本の専門学校に相当するフィンランドの職業学校での現地調査を通して、外国の成人の専門学校（職業訓練校）での学びや職業訓練の一端を明らかにする。

キーワード: 職業教育、フィンランド、成人教育、職業資格

Keywords: Vocational education, Finland, Adult education, Vocational qualification

### 1. はじめに

筆者はフィンランドの生涯学習への参加率の高さに注目し、2019年より、北部のロヴァニエミ市とオウル市を皮切りに市民カレッジの調査を始めた。フィンランドで「リベラル成人教育」と呼ばれる市民カレッジの講座の多くは趣味的なもので、日本の公民館やカルチャーセンターに相当する。しかし、当初参考にした「成人（25～64歳）の学習参加率」のEUの統計内容には、「リベラル成人教育」のような趣味に重点を置いた生涯学習だけでなく、成人のいわゆる「学び直し」である職業教育も含まれていると考えられる。そこで、職業学校の実態を明らかにすると共に、成人学習者と職業学校との関係、職業学校とリベラル成人教育との関係を探ることを目的に学校への調査を実施した。

フィンランドの職業学校に関する先行研究には、福田（2012）<sup>2</sup>、沼口（2017）<sup>3</sup>、成清（2018）<sup>4</sup> などがある。福田（2012）は、コンピタンス・ベースの教育の一環として「専門学校の取り組み」を紹介し、「テストの点数で将来を描くのではなく、どのような職種で何をしたいのか、そのために何を学ばなくてはいけないのかという具体的な目標が提示されているからこそ、それぞれの人生に向けて努力できるのである」と述べている。沼口（2017）は、北欧の職業教育・訓練制度の改革から学べることを現地調査から明らかにしており、フィンランドの職業教育については、「学校ベースの学習」ではあるが、職場に行き訓練を受けることも認められている。そのため、“ハイブリッド”と呼ばれている」としている。成清（2018）は、数ある職業資格の中から、社会・保険医療分野の職業資格である「ラヒホイタヤ」に注目し、問題点として、①移民の言語取得、②当該専攻への若者の入学者数の減少、③オールマイティ職であるが故の技術力、④他の専門職との関係を挙げている。

これまでの現地調査は、沼口（2017）のユバスキュラを除き、エスポー市にある職業学校 OMNIA などヘルシンキ周辺での調査が殆どであった。本研究では、国の北部に位置するオウル市内の職業学校、オウル地域職業学校（OSAO=Oulun seudun ammattiopisto、以下 OSAO）で調査を実施した。

## 2. フィンランドの職業教育

### 2.1 フィンランドの職業教育

フィンランドは資格社会である。フィンランド教育文化省発行の「フィンランド職業教育の概要」パンフレット<sup>5</sup>によれば、同国の職業教育の目的は、人々の職業スキルを向上させ、それらを維持し、産業の発展、能力のニーズに対応することにある。「フィンランドの職業教育や職業訓練は、能力に基づいており、顧客志向」であるとされているが、これは学生が以前に取得した能力が評価され、不足している能力の取得のみを補える、つまり学生のニーズに応じた資格の単位の提供が行われることを意味している。また、フィンランドの職業教育は、国と地方政府双方が資金面で責任を持ち、職場で組織される職業訓練も公的資金で賄われている。教育は、教材以外、食事も含めて無料で提供され、通学に際し割引も適用される。フルタイムの学生については、学資援助とローンを申請することができる。フィンランドでは基礎教育を終えた段階で、総合大学進学のための一般後期中等教育へ進むか、職業教育の後期中等教育へ進むかを決め、進学する（図1参照）<sup>6</sup>。「フィンランド職業教育の事実と数字<sup>7</sup>」によれば、2017年には、基礎教育学校を卒業後、53%の生徒が大学進学のための一般後期中等教育へ、41%が職業の後期中等教育へ進んでいる。職業教育に進学した場合は、後期中等教育段階で3年間の教育を受け、基礎職業資格の取得を目指し、その後、上級職業資格、専門家職業資格への道も備えられる。実際、後期中等教育段階の年齢層にあたる15-19歳ではなく、20歳以上の学生が職業教育全体の64%を占めており、この数字からもフィンランドにおいて「学び直しの機会」が多いことがうかがわれる。フィンランドの職業教育の歴史は古く、19世紀から既に専門のカレッジがいくつか設立されていたが、20世紀後半以降に発展、様々な変革を経て、現在の形に至っている<sup>8</sup>。

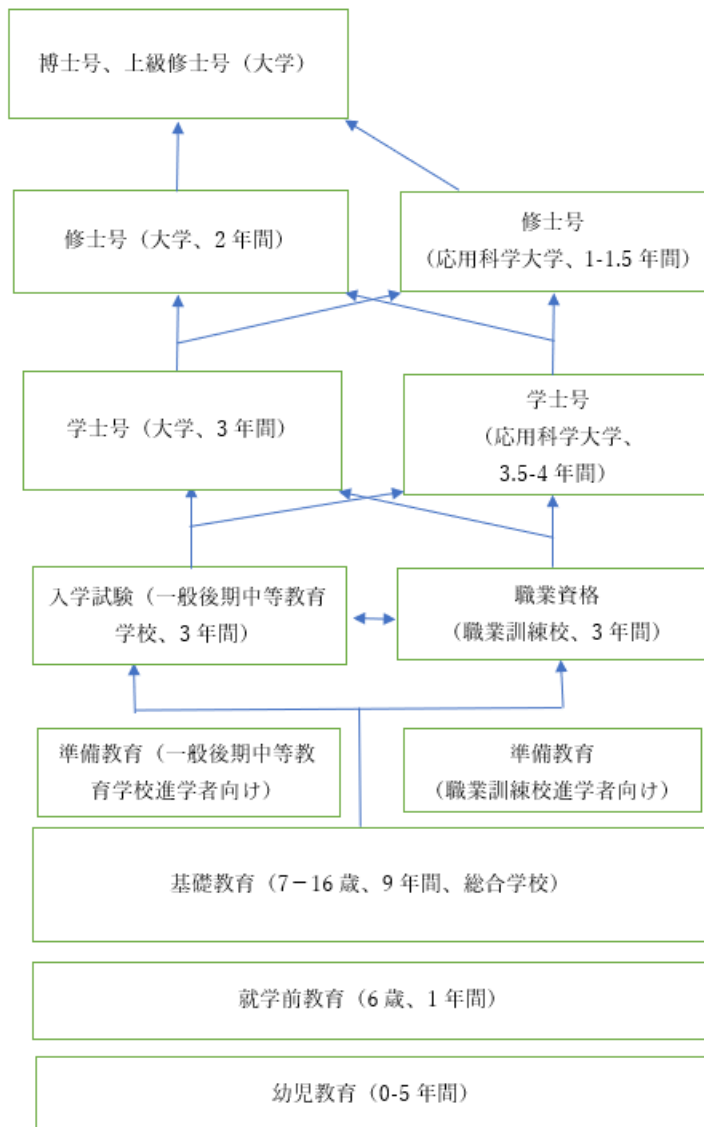


図1 フィンランドの教育制度

(Finnish VET in a Nutshell, p.3 "Education System in Finland" より筆者作成)

## 2.2 フィンランドの職業資格

現在、フィンランドには 164 の職業資格がある。後期中等教育段階の基礎職業資格取得には 180 能力ポイント（職業ユニット 145 ポイント+共通ユニット 35 ポイント）、上級職業資格取得には 120 若しくは 150 ポイント、専門職業資格取得には 180 ポイント（いずれも職業ユニット）が必要とされる。職業学校種別と取得可能な資格は表 1 の通りであり、最も人気のある資格として、社会とヘルスケア、ビジネス、レストラン・ケータリング等が挙げられている<sup>9</sup>。

表1 フィンランドの職業学校種別と取得可能な資格一覧

	職業資格	上級職業資格	専門職業資格
教育			運転指導員
人文科学と芸術	メディアと視覚表現	コミュニティ通訳	舞台と劇場の技術
	音楽	舞台と劇場の技術	メディア
	サーカスアート	メディア	法廷通訳
	芸術とデザイン	音楽制作	音声障がい者のための通訳
	ダンス	サーミの工芸	サーミの工芸
	芸術とデザイン	芸術とデザイン	
社会科学		情報と図書館サービス	
ビジネス、管理、法律	ビジネス	財産管理	財産管理
		ビジネス	リーダーシップとビジネス管理
		第1レベル管理	ビジネス
		起業	産業管理
			ビジネスアドバイザー
自然科学	自然環境保護	自然体験サービス	自然体験サービス
情報通信技術 (ICT)	情報通信技術	情報通信技術	情報通信技術
	情報電気通信技術	情報電気通信技術	情報電気通信技術
テクノロジー	車両セクター	自動車部門	車両部門
	食料生産	商用運転	食料生産
	鉱業	食品加工	エネルギー技術
	機械工学と生産技術	食品産業	機械整備とメンテナンス
	検査技師	エネルギー技術	電気技術責任者
	航空機整備	鉱業	ペーカリー部門
	土地測量	石部門	航空機技術
	表面処理技術	機械整備とメンテナンス	インフラ建設
	装置産業	実験と測定技術	表面処理
	木材産業	ペーカリー部門	装置産業
	建設	航空機技術	木材産業
	電気工学とオートメーション技術	土地測量	建設現場管理
	ビルメンテナンス技術	インフラ建設	電気工学とオートメーション技術
	技術設計	表面処理	ビル建設
	テキスタイルとファッション産業	装置産業	ビルメンテナンス技術
	ボート製造	木材産業	テキスタイルとファッション産業
		建材業	生産技術
		電気工学とオートメーション技術	商品開発
		ビル建設	ボート製造
		ビルメンテナンス技術	持続可能性と環境技術
	テキスタイルとファッション産業		
	生産技術		
	ボート製造		
	持続可能性と環境技術		
農林	馬の世話と管理	動物の世話	動物の世話
	漁業	馬の世話と管理	馬の世話と管理
	農業	漁業	漁業
	林業	農業	農村開発
	園芸	林業	農業
		トナカイの畜産	林業
	園芸	園芸	
健康と福祉	歯科技工士	マッサージ	マッサージ
	薬学	教育と指導	患者の固定
	社会とヘルスケア	知的障がい者サービス	教育と指導
	設備保全	メンタルヘルスとアルコール依存の福祉活動	リハビリテーション、支援と指導サービス
	ヘルスケア	メンタルヘルス路アルコール依存の福祉活動	高齢者ケア
サービス業	理髪と美容ケア	輸送部門	特別食サービス
	スポーツ指導	荷役	理髪と美容ケア
	ロジスティックス	空港サービス	スポーツ施設メンテナンス
	観光業	体育とコーチング	ホテルやケータリングサービスと第1レベルの管理部門
	船乗り	スポーツ施設メンテナンス	サービスロジスティックス
	清掃と不動産サービス	観光サービス	清掃と不動産サービス
	レストランとケータリングサービス	船乗り	コーチング
	安全と保安	案内業	警備員
		サービスロジスティックス	
		清掃と不動産サービス	
		レストランカスタマーサービス	
		フードサービス	
		小教区と葬儀サービス	
	税関		
	治安部門		

Finnish National Agency for Education and Ministry of Education and Culture (2019), Vocational Qualifications in Finland, 2019 “164 Vocational qualifications”より筆者作成

### 3. フィンランドの職業学校の調査から

#### 3.1 調査の概要

今回の調査対象の職業学校（職業訓練校）のあるオウル市は、“The Capital of Northern Scandinavia”という職がはためく人口約20万人を擁する北部の主要都市である。日本ではエアギターの世界大会で知られているが、テクノロジー産業やサービス業で栄える国内有数の経済都市であり、ロームなどの日本企業も進出している。また、オウル大学とオウル応用科学大学があることも相まって、街の人口は増加傾向にあり、平均年齢も38.5歳と若い<sup>10</sup>。調査対象としたOSAOは、そのオウル市の約8500人の学生が学ぶ国内で最も大きな専門学校のひとつであり、オウル駅周辺からバスで15分ほどの所にある。オウルだけでなく、ケンペレ、リミンカ、ムホス、プダスヤルヴィ、タイバルコスキという近隣5自治体にもキャンパスを持つ<sup>11</sup>。調査は、部局長へのインタビュー調査とその後行われた学校見学（各1時間）から成り、2019年8月23日の午前中に実施した。なお、学校見学には日本円にして約24,000円を支払う必要があった。近年、OECDのランキングで世界一になったことにより、フィンランドの教育には諸外国の教育関係者が関心を寄せている。見学者も多くいることから、このように見学科を徴収している学校もある。次項からは、それぞれの項目に従ってインタビュー内容をまとめて記載する。

#### 3.2 学校について

OSAOの目的は、北部フィンランドの学生たちのニーズに応えることにあり、学生は当該地域の全域から入学してくるといふ。また、地方自治体立という性質上、提供する教育や学生の募集人数などの重要事項は、構成自治体の議会が決定する。学生数は現在「8,500人」となっているが、これには短期コースの成人学生数も含まれている。OSAOでは国で取得することのできるほぼすべての職業資格の取得が可能で、英語によるビジネスコース以外は全てフィンランド語で教育が行われている。複数の校舎を持ち、オウルから150km先のタイバルコスキ校舎では鉱山、森林、観光業、15km先のケンペレ校舎では園芸、ムホス校舎では農業などもあり、扱っている資格や技能は校舎によって異なる。

部局長の着任時の校名は「オウルビジネスカレッジ」であったが、現在では日本語に訳した場合、「オウル地域職業学校」という名称に変更された。なお、OSAOの教育内容は日本の専門学校に似ているのだが、違うのは、フィンランドの職業学校が日本の様々な資格や技能を取得する専門学校を一か所に集約したような施設になっている点である。日本では、例えば理容の専門学校、製菓の専門学校、医療事務の専門学校、自動車整備の専門学校など、それぞれの技能に応じて学校が設立されており、それらの多くが私立である。しかし、フィンランドでは同じ広大な敷地の中にある建物の中で、パン作りを学ぶ学生、木材加工を学ぶ学生、ビジネスを学ぶ学生などが授業を受け、実習に励んでいる。インタビューによると、かつてフィンランドも日本と同じように、各技能に対し、それぞれの学校が存在していたという。しかし、15年ほど前に、様々な分野の職業学校が統合された。背景には、

管理上の利益があったと考えられる。以前は学生数によって予算が割り振られていたが、職業教育改革が行われ、現在は学生数に加え、卒業生数、高等教育進学者数、学生によるフィードバックなど、教育の成果が求められるようになった。



写真1 OSAOの校舎の一部(筆者撮影)

### 3.3 履修・単位について

職業資格取得までには、必修(共通)科目と選択科目の履修が必要である。例えば、ビジネス専攻の場合、3つの必修科目以外は多くの選択科目の中かから選ぶことができるため、同じ学校や専攻で学んでいても、それぞれの学生の学びは多様になる。しかし、核となる必修科目はフィンランド全土で共通していることから、例え途中で専攻を変えたとしても再度履修する必要はない。職業学校では、「単位」ではなく「能力ポイント(英語に訳すと Competence Point)」で評価される。この能力ポイントは履修時間ではなく、難易度を示している。

基礎教育を終え、職業教育に進む生徒は全体の60%くらいであるが、それは年によって異なる。現在のシステムでは、大学進学を目的とした一般教育と職業教育の同時履修も可能であり、実際、少数ではあるが、そのようなケースも見られる。OSAOでは卒業後、3分の1の生徒が大学進学へ進学する。その大半は応用科学大学に進むが、総合大学への道も閉ざされていないことから、数名は総合大学に進学している。

### 3.4 実習について

他のヨーロッパ諸国とは異なり、フィンランドでは国家試験ではなく、実習の評価で資格取得の可否が決まる。したがって、実践的な教育を重視しており、当初は座学であるが、最終3年目は実際の職場で1年間実習をする。実習は、提携先の外部の企業で働く学生もいるが、専攻によっては、学校が学内で運営するレストランや売店で働くケースもある。学生食堂の食事を作るのも学生、売店では、学生が作ったパンやケーキなどのお菓子類、お総菜なども売られている(写真2, 3参照)。その学内の売店を外部の人が普通のお店として利用している。その他、車の修理、理容などのサービスも提供されており、建設専攻では、グループごとに家を1軒建てて売ることも行われている。



写真 2 売店で売られているお菓子類（筆者撮影）



写真 3 学内施設での実習（筆者撮影）

学校が学外に所有している施設で働くケースもある。例えば、OSAO のレストラン・ケータリング専攻の学生は、市内中心部にある実習レストランであるヒリック (Hilikku) で 1 年間働く (写真 4, 5 参照)。ヒリックは、月曜から金曜の 11:00~13:00 で営業しており、11.30€ でランチを提供している<sup>12</sup>。筆者も実際に訪れたが、古い赤レンガ倉庫のような建物をリノベーションしたと思われる近代的な内装を施した店内で、監督者立会いの下、学生が調理をし、接客をしていた。コロナ禍になる前の 2019 年の段階では、いくつかのコースメニューの中から客が選択し、コースに応じてサラダやパンはバイキング形式で取りに行く方法が採られていたが、今はメニューを 1 種類に限定しているようである。テーブルに一輪のバラの花が飾られたおしゃれなレストランで、全体的に雰囲気明るく、料理もたいへん美味しかった。利用者も多く、店内は賑わっていた。また、現地の相場、料理の量やクオリティを考えると、値段も大変リーズナブルであった。ヒリックのような実習レストラン (opetusravintola) はフィンランド国内に数箇所存在するようである。

フィンランドで職業訓練を受ける場合、職業学校に通う方法だけでなく、実際に職に就きながら学ぶ徒弟制度もドイツほど盛んではないがある。職業訓練校では実習の際に給与は支払われないが、徒弟制度では支払われる点が両者の違いであるという。



写真 4 実習レストランで提供される食事の一部（筆者撮影）



写真 5 実習レストラン（筆者撮影）

### 3.5 社会人学生について

調査では、部局長へのインタビューに続き、校内見学があったが、その際、授業の合間の休憩中の

教員数名にも直接お話をうかがうことができた。中には、企業で働いていた時に東京に住んでいたという教員もいた。社会人学生について尋ねたところ、教員間でもそのような学生に対し、あまり「成人」という認識は持っていないようである。と言うのも、OSAO では第 3 学年の生徒のことを「テクニカル・アダルト」と呼んでいることから、「アダルト」と言うとそちらのイメージが先行してしまい、「大人の学生」というイメージはない。強いて言えば、労働局から来ている 20 代後半の学生のことを「成人＝アダルト」とみなすことがあるという。

以前、成人教育と若者の教育は異なる法システムの下にあったが、近年、職業教育にかかわる法改正や再編が行われたことにより、現在では両者ともに「成人教育」にまとめられている。但し、基礎教育を終えて職業学校に直接入学する場合は卒業までに 3 年を要するが、失業等により、若しくは新たなキャリアを身につけるために社会人が入学する場合は、以前の経験が考慮されるため、2 年以下での卒業も可能である。

### 3.6 その他

OSAO で学ぶ学生は様々な専攻に属し、職業資格の取得を目指す。専攻によって人気や不人気があり、倍率に差が生じている。人気のある IT 専攻などは、パソコン設備にも限りがあるため、人数制限を設けざるを得ない。一方で、ケータリングやレストランはあまり人気がないため、定員割れしてしまうこともある。また、OSAO では本コース進学前の生徒のための準備教育も提供している。これには、移民向けのフィンランド語などが含まれる。

学生の出欠、成績等を管理するオンライン上のシステム「ウィルマ」を導入している。「ウィルマ」は公の機関が提供している訳ではないが、国内の多くの学校が導入しているとのことである。

職業を通じた国際交流も盛んに行われているようで、分野によっては日本への留学の道も備えられている。座学で授業を受けていた学生の中には「今度日本に留学する予定」と話していた学生もいた。

## 4. まとめ

本稿では OSAO での現地調査を通して、その実態を明らかにし、成人学習者と職業学校、職業学校とリベラル成人教育との関係を探ることを目的とした。それぞれの点について、日本との比較も含めつつ考察する。

第一に、フィンランドの職業学校についてであるが、日本では、理容・美容師の専門学校、調理師の専門学校などそれぞれの職業資格に応じた専門学校があるのに対し、フィンランドではこれまで個別に存在していた職業学校をひとまとめにし、いずれの資格を取得する場合でも、共通科目を作り、職業学校の最初の入り口をひとつにしていた。筆者が同時期に調査してきた同国の市民カレッジも、街に一つ大きなカレッジが存在し、その中で様々な講座や開催場所が細分化されているという、専門学校と同様、入り口が一つというシンプルさであった。趣味的な生涯学習に限らず、職業教育にしても、「入り口が一つ」という点は合理的なフィンランド社会を象徴しているように見える。しかし、



このシステムはそれぞれの組織によって異なる複雑な手続きを経ずに済むことから、どの年齢層にとっても生涯学習に参加しやすい環境を創り出しているとも考えられる。

近年の教育改革により、具体的な成果や学生による評価が問われるようになった点は日本と共通している。しかし、単位取得の基準が履修時間ではなく、能力ベースであることと、国家試験ではなく実習で資格取得が決まる点は日本とは異なる。また、ヒリックのような実習レストランが国内に何か所か存在することも日本との違いとして挙げるができるだろう<sup>13</sup>。

第二に、成人学習者と職業訓練校との関係であるが、統計の数字上では 20 歳以上の学生が 64%と出ているものの、学校では後期中等教育段階の生徒と 20 歳以上の学生との境は全くと言って良いほど認識されていなかった。これには、フィンランドが成人の学び直しに優しい社会であることや兵役があることなどが関係している可能性も否定できないが、日本の状況と少し似ている部分もあるのではないかと考えられる。筆者はかつて日本の専門学校で数年間、非常勤の教員として勤務した経験があるが、高校を卒業したばかりの学生と社会人経験を持つ学生の違いは把握しつつも、フィンランドの専門学校の先生方と同じく、両者の違いを特に意識することはなかった。それよりも、学生ひとりひとりと交流を通して、彼らがこれまでどのような経験をしてきて、どのようなことに興味があり、現在、どのような活動をしているのかという点を知る方が教師にとっては重要であった。日本の場合は専門学校が後期中等教育の後に、フィンランドの場合は職業学校が後期中等教育に位置付けられている点は異なる。しかし、職業教育における「社会人学生」は、学内よりもむしろ社会システムの中で、若しくは学生自身が学生生活を時間的、経済的にやりくりしていく上で、何らかの障壁を感じた時に生じる言葉なのかもしれない。

このように、フィンランド北部の職業学校での調査を通して、日本との共通点や相違点について学ぶことができた。なお、課題としていたリベラル成人教育と職業教育との関係であるが、今回の現地調査から特に接点は見られなかった。OSAO 内で一部、リベラル成人教育が行われているという情報を耳にしたが、詳細を掴めなかったため、次回の課題としたい。

---

《参考・引用文献》

<sup>1</sup> Eurostat, Participation rate in education and training (last 4 weeks) by sex and educational attainment level,

[https://ec.europa.eu/eurostat/databrowser/view/trng\\_lfse\\_03/default/table?lang=en](https://ec.europa.eu/eurostat/databrowser/view/trng_lfse_03/default/table?lang=en)  
(2022 年 1 月 30 日閲覧)

<sup>2</sup> 福田誠治, フィンランドはもう「学力」の先を行っているー人生につながるコンピテンスベースの教育, 亜紀書房, pp.97-123 (2012)

<sup>3</sup> 沼口博, 北欧における職業教育・訓練制度の改革と課題ーノルウェーとフィンランドを中心に, 教育学研究紀要, (8), pp.35-46 (2017)

<sup>4</sup> 成清美治, フィンランドの職業教育に関する一考察ー福祉と保健における職業資格としてのラヒホイタヤ養成システムの現状と課題, 神戸親和女子大学大学院研究紀要, 第 14 号, pp.43-53 (2018)

<sup>5</sup> Finnish National Agency for Education and Ministry of Education and Culture, *Finnish VET in a Nutshell*, 2019, <https://www.oph.fi/sites/default/files/documents/finnish-vet-in-a-nutshell.pdf>

---

<sup>6</sup> Ibid., p.3

<sup>7</sup> Finnish National Agency for Education and Ministry of Education and Culture, *Finnish VET in Facts and Figures*, 2019, [https://www.oph.fi/sites/default/files/documents/vet\\_facts\\_figures.pdf](https://www.oph.fi/sites/default/files/documents/vet_facts_figures.pdf)

<sup>8</sup> Marja-Leena Stenström and Maarit Virolainen, *The history of Finnish vocational education and training*, 2014

[http://nord-vet.dk/indhold/uploads/report1a\\_fi.pdf#:~:text=The%20history%20of%20Finnish%20vocational%20education%20and%20training,a%20result%20of%20new%20legislation%20passed%20in%201879.](http://nord-vet.dk/indhold/uploads/report1a_fi.pdf#:~:text=The%20history%20of%20Finnish%20vocational%20education%20and%20training,a%20result%20of%20new%20legislation%20passed%20in%201879.)

<sup>9</sup> Finnish National Agency for Education and Ministry of Education and Culture, *Vocational Qualifications in Finland 2019*,

<https://www.oph.fi/sites/default/files/documents/vocationalqualificationsfinland2019.pdf>

<sup>10</sup> City of Oulu, <https://www.ouka.fi/oulu/english/information-about-oulu> (2020年12月31日現在)

<sup>11</sup> OSAO, <https://www.osao.fi/>

<sup>12</sup> Ibid., Opetusravintola Hilikku, <https://www.osao.fi/palvelut/opetusravintola-hilikku/>

<sup>13</sup> 日本では、東京の香川調理製菓専門学校が校内に「レストラン松柏軒」「菓子工房プランタン」という営業店を持っているが、全国的に見ても、専門学校が実習用の常設店を設ける例は非常に珍しい。香川製菓調理専門学校「附属教育施設」<https://www.kagawa-choka.ac.jp/facility/auxiliary.html> (2022年3月14日閲覧)

《注》本稿では、「職業学校」と訳したが、フィンランドの職業資格取得のための学校には「専門学校」「職業訓練校」「職業学校」と3通りの訳し方がある。筆者も当初「職業訓練校」としていたが、フィンランドの学校は後期中等教育段階に属しており、日本に存在する「職業訓練校」や「専門学校」と全く同一であるとは言いきれないため、敢えて日本ではあまり耳にしない「職業学校」と訳した。

本研究は科学研究費補助金（19K14070）の助成を受けたものです。